見守り・パトロール活動

隊員として活動する大塩瑞夫さんと池沢善郎さん

大塩さんは、月曜から金曜日の週５日、池沢さんは月曜、木曜、金曜の週３日、大沢ひまわり隊のボランティアとして、危険箇所の見守りとパトロールをしています。「いつまで続くのかとは思います。でも、立っているだけでも効果がありますから」と話す池沢さん。大塩さんは「小学生ばかりでなく、中学生の安全にも気を配ってほしい。私が立っている場所は、車の往来が多く、中学生が道路を渡る際にとても危険です。信号は無理でもせめて横断歩道があればと思っています」。最近では、子どもたちの顔も覚え、休んだ子がいると分かるようになったというお二人。「子どもたちも、今では皆あいさつしてくれるようになり、励みになっている。毎日、立つのは大変です。とくに雨の日は。でも、子どもたちの笑顔のために続けていきたいと思っています」と話してくれました。

いさつする程度だった関係が、より親密になり、保護者同士の知り合いが増えました」。

負担感と緊張感の維持

大沢ひまわり隊の活動で特筆すべき点は、登下校時に保護者が最後まで付き添うことです。登下校時の完全付き添いは、防犯の面で優れる反面、負担も大きくなります。「活動を始めてしばらくたったころ、ある人から『いつまで続けるんでしょうか。孫は低学年なので…』と心配そうに聞かれたんです。当番制でも、やっぱり負担がありますから。付き添いのために仕事をやめなくてはならなかった人もいます。でも、現時点ではまだ犯人も逮捕されていませんし、活動を緩める根拠がないんです」。そう話す言葉には非日常を経験した重さがあります。

緊張感を維持することは、大変な労力を必要とします。「年度が変わるころ、負担感も相当高まっていました。そんな中、５月に秋田で起きた事件は、衝撃でした。緊張感が高まり、それまで出ていた負担感を訴える声も少なくなりました」。

人と人のつながり

「組織は『小さく産んで大きく育てるのが理想』という話を聞いたことがあるんですが、ひまわり隊は最初から大きく生まれてしまいました」。それでも、今の活動を維持していくには、さらに参加者を増やす必要があるという粉川さん。「分母が大きくなれば、付き添いの負担も減りますから。みんなでやることが大切です。親やお年寄りだけで続けていくことはできません」。

一人でも多くの方に参加してもらうためには、人と人、地域のつながりが欠かせません。ひまわり隊では、８月に大沢ひまわりふれあい広場というイベントを開催しました。「今、地元の行事が少ないんですよ。子どもを核にしたイベントをすることで、地域の交流を深めていきたいと考えてます。それに、中高生のときに地元の行事に参加すると、大人になっても参加するようになるんですよ」。

また、中高生の安全にも関心を向けるべきだといいます。「いつ、誰が、どうなるか分からないという意識を持つことが大切です。安全を守るということは、小学校だけの問題じゃないんです。中学生でも不審者の被害に遭ってますから。小学校区だけではなく大沢地区として、活動していくことが大切なんじゃないでしょうか」。

さらに、地区を越えた活動も視野に入れています。「ほかの学校での取り組みを知る機会はあまり多くありません。ＰＴＡ同士の連絡や横のつながりを作って、共通の問題を解決しようという意識を高めていく必要も感じてます。ほかにもどんどん声をかけて、社会の情勢にあった組織と活動内容にしていけたらと思っています」。